

SINK OR SWIM

by Su Friedrich

The Japanese translation

Copyright © 1990 by Su Friedrich

溺れるか 泳ぐか

接合体

ギリシャの神ゼウスにはヘラという妻がいた。しかし彼は数々の浮気を重ね、妻以外の女性との間にも多くの子供がいた。更に、彼には女親の存在なしに生まれた子供が一人いた。戦と正義の女神、成長した姿で鎧を身につけて彼の頭から生まれてきた娘、アテナである。アテナは三人の処女神を率い、荒々しく情け容赦のない戦士として知られていた。ゼウスは彼女を可愛がっていたので、目にするのも畏れ多い彼の盾と、武器である必殺の稲妻の矢を、彼女に持たせた。

Y染色体

X染色体

目撃者

小さな女の子がいました
おでこのちょうど真ん中に
小さなカールが掛かってました
いい子のときは
とてもとてもいい子で
悪い子のときは
最悪

処女

少女は外に遊びに行けば、溝川はナイル川。木の上のお家は、ハーレムで、宝石を身に纏いシルクで着飾った美女で一杯で。自転車はまるで大きな黒い裸馬。防波堤の側で泳げば、金髪の人魚が水中の洞窟を通り抜けて行くのを見た。少女の父親は、世界中の誰より賢く、ハンサムな男性だった。

理想郷

少女と妹は甘い物を食べるのを禁じられ、父親はテレビを買うのを拒んだけれど、週に一度、彼女たちはお楽しみの世界で我を忘れた。金曜の夜7時半は、ある老人の家へと行くことになっていたのだ。老人はまず台所へと彼女たちを連れて行きアイスクリームサンデーを作らせた。いつも選びやすいように何種類かのアイスとトッピング、フルーツ、ナッツとスプレーチョコを用意してあった。用意ができたなら、彼女たちはサンデーを持って居間へとやってくる。明りを消しテレビをつけ、暗闇の中に座って一時間ドン アミッチィの空中サーカスショーを見た。

誘惑

7才の誕生日に、父親はギリシャ神話の本を少女にプレゼントした。床についてからもずっと、少女はクローゼットの中に隠れて物語を読んだ。ある夜、父親は仕事から遅く帰ってきて、本を読み耽っている少女を見付けた。両手を頭の後ろで組んでベッドに横たわり、お気に入りの神話はどれかと尋ねた。それは、女の子だったがために生まれてすぐ捨てられたアトランタの話だった。森に置き去りにされ死にかけたところを雌熊が彼女を見付け、並はずれた走り手とハンターになるまで育て上げた。アトランタの父親はそれを聞き付け、男と変わらぬ能力を持っていたのを知って彼女を家に連れ帰った。アトランタは結婚は決してしないと誓いを立てた。そして自分を勝ち得たいと願う男とは足の速さで競いあうつもりだった。負ければ死を意味したにもかかわらずたくさんの男が挑み、ことごとく失敗した。しかし愛の女神アフロディーテは、勝ち負けも彼女の心もそろそろ折れる時期と確信してヒポメネスという名の若者に手を貸そうと申し出た。約束の日、彼は黄金のリングを3個持ってやってきた。勝負が始まりアトランタがヒポメネス相手に優位に立つや否や、彼は彼女の足元に一つ目のリングを落とした。アトランタはその珍しい果実を拾い上げようと動きを止めたが、その時は間もなく彼に追い付いた。すると

彼は二つ目のリングを道の向こうに投げ、彼女はもう一度止まることにした。しかし今度は彼を追い抜くことは難しくなっていた。彼女が止まると、今度は三つ目のリングを遠く離れたところへ放り投げた。またもやアトラントはコースを外れずにはいられなかった。結局彼女は競走に負け、彼との結婚を受け入れざるを得なかった。

魅惑

アトラントの話が終わらないうちに父親は眠りに落ち、その結末は聞いていない。アトラントは競走に負けた後すぐに結婚した。驚いたことに彼女はヒポメネスとの新しい生活の中に幸せを見出だしていた。アフロディーテの力によって二人は一緒になったのだから二人には彼女に敬意を払う義務があった。しかしほとんどの新婚夫婦がそうであるように二人はお互いの事しか考えず神聖な義務を果たすことを怠っていた。愛の女神は怒り、報いとして二人をライオンへと変えてしまう。

現実

ある日少女は父親に泳ぎを習いたいと言い、その日の夕方、大学のプールへ出掛けた。父親は少女を一番深いところまで連れていくと、キックと息継ぎの基本を説明し、一人で泳いで戻れと言って突き放した。

少女はパニックに陥り暫く必死でもがいたが、やがて何とか顔をあげていられるようになった。その日を境に彼女は泳ぎに夢中になった。

次の夏ニューハンプシャーに行ったときも彼女はほとんどの時間を近くの湖で費やした。水は奇妙なオレンジ色だったが甘くて冷たく、岸は白樺と松の木に縁取られていた。

父親は湖を泳いで渡れたが、彼女と一緒に岸辺で過ごしたり、彼女が潜っている間筏の上で日光浴をしたりしていた。とある午後、父親は少女に水中に住む毒蛇の話始めた。やつらの巣は湖の底にあるんだ、と彼は言った。人が泳いで通り過ぎると、水面まで急浮上してまわりつき毒のある歯で噛み付いてしまうんだ。少女は湖水を眺めながら、その歯は水着をつき抜けてしまうのだろうか不安になった。

その夜、少女は百科事典を調べ毒蛇は主に南部に生息し、中西部にはほとんどいないということ突き止めた。母親は、毒蛇がすんでいるのはここから何千マイルも離れているんだと説明したが、地理的な説明なんかでは少女は安心できなかった。

流砂

ある夜、父親はタイムマシンを発明する男の映画に少女を連れて行った。主人公が西暦二万年に到着してみると、そこは美しく、幸福で無抵抗の人間たちで一杯の世界だった。図書館の本は読まれずに腐り掛け、その美しい人々はもはや西洋文明の原理など理解もしなければ気にかけてもない。結局、その世界の住人は快樂に身を委ねているうちに、地下の洞窟に住んでいる緑色の怪物に食べられてしまうのだった。人間と怪物の関係は単純で、怪物たちは空腹になるとサイレンをならし、人間たちはその音を聞くとゾンビのように起き上がり彼らの待つ死の洞窟へと行進して行く。

少女はサイレンの唸る音が恐ろしかったし、動物のように殺されて行く人間を見ていたくなかった。彼女は目を覆って映画館を出たいとねだった。父親は近寄ると彼女の顔から手をはがして映画を最後まで見ろと強制した。

教育

少女はゲームで勝つのが好きだった。かけっこや取っ組み合いで男の子をまかすたびに特別なスリルを味わった。男の子たちはいつも先に彼女を降参させようとしたが、彼女は腕を痛くされるまで参ったとは言わなかった。

父親はゲームは嫌いだったがチェスが好きで彼女に教えてやると言った。男の子たちとは違い、父親は彼女が攻撃的な対戦相手になることを望んだ。少女は父親と一緒にできるゲームがあって嬉しかったし、本気でレッスンをうけた。何回も試しているうちに、とうとう少女は父親を負かしてしまった。勝利の味は甘かった。その代償が大好きな相手を失うことだと気付くまでは。父親はその日を境に二度と彼女とチェスをすることはなかった。

忘却

父親は人類学者で言語学者だったので、他の民族がどんなふうに出産、成人、結婚、そして

死についての儀式を行うかを少女にたくさん話して聞かせた。彼女はそんな儀式で歌い踊るインディアンだったりアフリカ人だったりする自分を想像するのが好きだった。それに比べると、アメリカの儀式は退屈で表面的に見えてくる。父親がクリスマスツリーの飾り付けや父の日に娘をミサに連れて行くのをしぶるのはそのためかもしれないと少女は思った。ある年の少女の誕生日、父親はアイススケートパーティーをしようと持ち掛けてきた。リンクにつくと友達は何、彼とスケートするために列をなした。「みんなが滑り終わるまで向こうでココアを飲んで待ってる」と少女は言った。友達はみんな楽しそうだったが自分の番が回ってきて、父親のあまりの速さに驚いた。スピードについて行けず、かといってゆっくり滑ってと頼むこともできず、結局でこぼこの氷の上を引き摺られるしかなかった。

自然

夏に、父親は中西部の大学へ講義に出掛けた。キャンパスから何マイルか離れたところに人の来ない採石場があり、春に降った雨が一杯溜まっていた。夕方に父親は満月の下で泳ごとそこへ出掛けた。その採石場には入水禁止の立て札があった。暑さでへとへとに疲れていたけれどその意味を聞こうと誰かに出会うまで待った。誰もがみんな何て運のいい人だと言った。去年の夏、ここに来ていた教授が泳いでいて毒蛇に噛み殺されたのだった。

記憶 1

少女の父親には大切な妹が一人いた。子供の頃ニューイングランドの農場で暮らしていて夏の間はよく冷たい湧き水の流れ込んでいる隣の家のプールに泳ぎにいった。妹はいつもは兄の雑用が終わるまで待っていたけれど、ある日兄を待たずに一人で泳ぎにいった。砂利道を走っていったのでプールに着く頃には埃と汗に塗れていた。その日は暑かったけれどプールには誰もいなかった。妹はさっと服を脱ぐと冷たい水に飛び込み、その瞬間に心臓発作で死んでしまった。兄が雑用から帰ってくると家には誰もいなかった。プールにみんないるだろうと思って向かう途中悲鳴が聞こえ、走り出した。悲鳴は大きくなって行く。彼は庭に駆け込んだ。そこには妹の亡骸の側に座り込んでいる母親の姿があった。家では通夜が行われ、彼はその間じゅう側に座り妹を見つめ続けた。誰もかれをせめはしなかったけれど、何年もの間彼は罪の意識と喪失感という重荷を引き摺っていた。

記憶 2

二十年後父親は初めての子供が生まれ時の最初の一週間について詩を書いた。赤ん坊と一緒に道を歩いたり、ミルクを飲んでいる側にそっと座っていたり、深い瞳の中を覗きこんでいたりする様子を書いた。そして誰も子供の一生を言い当てることはできないときずいたのだ。それでも子供が学校に通うようになった姿や大人の女性になった姿を想像しようとした。で、最終的に、こう呟いたのだ。「すべての問いには答えがあるけれど、ここにはつまるところ溺れた妹にすり代わる沈黙の顔が有るだけだ。

喪失

少女が大好きなのは夜更かし、間食、部屋を散らかすこと、兄弟喧嘩。母親に惨めな思いをさせることさへのぞんでいた。父親はほとんど仕事場にいるので大して気にとめなかったが、大喧嘩の真っ直中に家に帰ってくるともあった。この狂った子供達をなんとかしてくれと母親が頼んだけれど、脅かしや多少のお仕置は無意味だった。父親は違う方法を試すことにした。子供達が喧嘩を続けていると父親は風呂場に行き蛇口を捻った。何分か後、子供達のところにもどり髪を掴んで風呂場に引きずり込み、浴槽の側に座らせ母親の言う事を聞けと叱り、顔を水に押し込んだ。少女は叫ぼうとした。しかし叫ぼうとすると窒息しそうになる。父親の足を殴り蹴り手から逃れようと首を延ばすが父親の手は大きく力強かった。というよりも動くとも窒息しそうになる。少女はおとなしくするしかなかった。胸に痛みが広がり頭を圧迫する。放して、そんなつもりはなかったの、時々頭に血がのぼっちゃうだけ、放して、御免なさい、お願い放して。目は大きく見開かれ肺は破裂しそうになって手は必死で空を掴もうと、水の中で叫んでいた、と突然父親の手が首から離れたことに気付いた。少女は床に転げ咳き込んで震えていた。妹は冷たい水でびしょりの少女の前に座り込み、母親は泣き叫びながら立ち尽くしていた。

血縁

三二-ベルトの歌曲

ジャーナリズム

十才の誕生日に少女は妹から緑色の表紙の日記帳をもらった。それには小さな鍵がついていて少女は慎重にその鍵をベッドの下に隠していた。一ページ目には大きくこう書いてあった。「人の日記を読むなんて最低。これは個人的なもの。」ほとんどのページは宿題の罰の話や男の子との喧嘩、友達と遊んだ事などで埋め尽くされていた。毎日は書かなかつたので両親の離婚を告げられたときにはまだ白いままのページが残っていた。少女は恥ずかしくて離婚の事を親友にさえも一年以上も秘密にしていた。そして日記に告白し続けた。書いて文字になると本当に起きてしまう現実のように思えてきて少女は大好きな万年筆の代わりに鉛筆を使った。いつか少女が日記を開けて見ると、書いてあったものが消されていた。母親の仕業に違いなかった。

狂気

子供たちは手に負えなくなり、家庭は崩壊し、何もかもが目茶苦茶になった。夕食を食べていると、母親は急に、私が死ねばいいんでしょう、そうすればあんたたちの父親だって自分のしたことを思い知るわとわめきだしたりもした。ある夕方、父親が自分のものを取りにきた。暫くいてほしかったけれど両親はたちまち言い争いになり父親はすぐに出ていってしまった。母親は激怒し娘たちを連れてベランダへ出、窓を開き娘を窓枠に上らせ、腰に手を回した。娘たちは遥か下の歩道を見下ろして怯えていた。半ブロックほど先に進んでいた父親の気を引こうと、ので、注意を引くために母親は叫び声を上げた。彼は立ち止り、ゆっくりと振り向き、三人を見上げた。少女は手を振りたかったけれど、母親の力は強かった。母親は身を乗り出して叫んだ。「あなたは、ただわたしたちを捨てて自分の家庭に帰るだけのつもりでしょうけど、もしここから飛び下りて足元に折り重なったらどうなるかしら。どんな気分？」少女は父親が何か言ってくれるのを待ったがただしばらく眺めてから頭を振って歩き去った。

宿題

父親が去った後真っ先に家に入り込んできたものは白黒テレビだった。母親はまた働きに出るようになったので少女は毎日午後家に帰ると大好きな番組を何時間でも見られるようになった。小遣いも貰え、買えるだけキャンディを買った。

幽霊

親愛なるパパ

パパがいなくなってからママは仕事から帰ると御飯を作り私たちを部屋においやるとリビングのあの黒ずんだオレンジ色の椅子に座ってシューベルトのレコードを繰り返し繰り返しかけるようになりました。特に私が気に入った曲があります。歌詞の意味は分からないけれどママはそれを聞くと酷く泣いてしまいます。私たちはママの側に行ってママを愛していると、言い、パパがまた戻ってきてくれるようないい子になると約束します。最近その曲、糸を紡ぐグレットヒエンの訳詞を見付けました。知ってた？いなくなってしまう恋人が恋しくてその人なしには生きていられないと思う女の人の歌です。あんなにうっとりとしたメロディーにあんな悲しい詞がつくなんて不思議ですね。でもそこがこの曲をより力強いものにしてるのでしょ。記憶と現実の葛藤を完璧に捕らえています。

愛を込めて

この手紙、出せばいいけど

足伸:

肉体

離婚が成立すると両親はもう口をきくこともなく父親は二度と家に来なくなった。少女は何年かして父親とまた会うようになるけれど、そんなことは本当にまれだった。ある夕方、父親は少女を日本食レストランへ連れて行った。そこで二人目の妻を紹介し一緒にメキシコ旅行に行かないかと誘った。少女はその女性の側にいることで落ち着かないとおもったけれどもうなづいた。何週間かして父親が電話で妻は家に残るといった。二人きりで出掛けることになった。少女は父親と一緒にいることが誇らしかったし、父親も娘に完璧なメキシコ旅行をプレゼントできて満足げだった。暑くて退屈な一週間が過ぎ、二人はアカプルコへ向かった。ビーチでの最初の日、少女は薄い黄色のシャツを着て、細い金のネックレスをした男の子に声をかけられた。彼は全然英語が喋れなかったし、少女は「お願いします」と「ありがとう」しかいえなかった。彼と何時間か過ごして、少女は父親との昼食の約束を忘れていたことに

きづいた。父親は酷く怒って二度と同じミスはしないように叱った。少女は父親をとて怖
いと思ったにもかかわらず次の日の昼食と夕食にも遅れてしまった。翌朝早く父親は少女を
起こし、荷物をまとめてロビーにこいと言った。ロビーに行くと父親は彼女を一人で次の便
に乗せてシカゴへ返すためにこれからメキシコシティへ向かうと言った。少女は一人でバ
スの後ろの席に座り流れ去る海岸線を見ていた。飛行場のゲートで帰りの飛行機に乗るまで
一言も話さなかった。

妬み *妬み*

父親にメキシコから突然帰されたことがどんな気持ちだったかを、少女は一度も伝えた事は
なかった。十年たって少女は父親がその事について書いた詩を見付けて驚いた。「なんて悲
しげにあなたは嘔り泣くのか」というタイトルだった。詩は呼び掛けから始まりこう問うて
いる。「私が家を出て家庭を壊してからあなたは月光のように遠い存在になってしまった。
君は ~~あなたは~~あの海辺のアドニス^{アドニス}を欲していたのですか。あなたの別離に向けられた瞳は、離
婚によって親を失った子供たち全ての瞳を現している。涙の膜を通して見れば父親なんて段
々と薄れて染みようになってしまう。」

少女は長い間父親に何らかの謝罪を期待していたけれどこんな事は思ってもみなかった。父
親はまだ気付いてさえないのだ。彼自身が人を蔑みねちねちとした愛人のように振るまい
続けたことも、彼女の涙は捨てられた子供の涙なんかではなく、犯してもいけない罪の罰をお
わなければならなかった十代の少女の不満の塊だった事も。

発見 *ゆにみ*

1950年-1989年に置けるアメリカの血縁制度

少女は父親に学校であったことを話せる夕方をいつも楽しみにしていた。夕食前に父親から
仕事ながびくと電話があるとがっかりした。今夜はもう会えないと言う事だからだ。何年
も経って少女は図書館の目録で父親の名前を探した。離婚を決めたとき何を書いていたのだ
ろうと思って。唯一手に入ったのは論文を集めたもので「言語、コンテクスト、想像力」と
いうタイトルだった。離婚の年に書かれた本のうち二冊は血縁制度の研究に触れていること
がわかった。一つは「社会変化の言語学的考察、ソビエトにおけるロシア人の血縁制度の変
化、というもので、もう一つは「原始インド、ヨーロッパ人の血縁制度」というものだった。
少女は父親の家庭生活に対する接し方について何か分からないかと思って本を机まで持って
きた。一冊目を読もうと一時間ほど頑張ったけれど書いてあることは全く理解できなかった。

競争

父親の書いた本の中で少女が初めから終りまで読んだ本が一冊ある。それは性愛と欲望の神
であるアフロディーテに対する詳細な研究で母性愛と献身の神デメターとの比較であった。
最後の 最終章ではこの二種類の愛における長年の対立を分析している。父権制度においては常に女
性のうちにある愛欲と母性的献身の共存に恐れを抱いていると指摘し、アフロディーテとデメ
ターの両方を体現する女神が以前^{以前}存在していたであろうと考え、その二つの存在を再統一
する必要を論じている。そしてこの本は彼の3人目の妻に捧げられていた。

重婚 *二重結婚*

少女が大人に成ってからは父親と少女は友達のような関係を保とうとしていた。手紙をやり
取りしごくまれに会うこともあった。誕生日やクリスマスにはプレゼントを交換したけれど
彼女は三人目の妻やその二人の子供には何も送らなかった。去年の夏、彼女は父親の家の近
くで教師の仕事をした。父親を家に招くと十一才になる娘を連れていくと言った。何年もの
間その女の子とはあっていたなかった。会うのを楽しみにしていると彼女は言った。次の日曜
バス停まで向えに行き、家で昼食を食べた。庭でハムサンドを食べていたとき彼女は黙って
座って父親とその女の子の話を聞いていた。何について話しているも議論か講義のように
聞こえてきた。レモネードをもう一口飲んだ。話しに加わりたかったけれど二人はあまりに
も打ち解けている様子だった。丁度その時父親がその女の子の話しをつまらないと言って遮
った。それを見て彼女は恐怖で強張った。これは自分だ。その小さな女の子によって全く同
じように演じられている自分だ。彼女ははっとした。女の子は父親が永遠に去っていったあ
の日の自分と同じ年だ。彼女は素早く立ち上がって皿を台所へ運びクッキーの袋を開けた。

恐怖にこぼれた。

タバコを吸いながら
アイア
同じ文を
打っている

父は新しい家庭を決して捨てないだろう。父は年を取ったし、幸福な結婚だった。彼女は窓の外へ目をやった。そして日陰に寝転がっている父親を見た瞬間、哀れみとも妬みともつかない言い様のない感情が起こった。日向に一人座ってよりおもしろい話を作り出そうとしているその女の子に対して。

アテナ、アトランタ、アフロディーテ

彼女はあのオレンジ色の湖に行く度に、向こう岸まで泳いでみようとした。父親は何度でも渡り切る事ができたが、彼女は中頃までくるといつもあの毒蛇のことを考え始めてしまうのだった。毒蛇はルイジアナから遠く離れたところに生息していると分かってはいても、自分が向こう岸に近付くのを待っているように思えてくるのだ。最後にそこへ行ったときは友達と一緒に、何時間かは本を読んだり浅瀬で遊んだりしていたが、彼女は湖を渡る旅をはじめようと決心した。泳ぎ出すと不安に襲われた。彼女は自分と戦った。岸は遠くなり足は痙攣し始める。それでも父は私を愛している。愛していない。成し遂げなければ。できるわけではない。今半分まで来た、休みたい。深い水中を見つめるのが怖くなって仰向けになって背泳ぎを始めた。そして考えた。きっと毒蛇に嘔まればこの苦しみから逃れられるだろう。じゃなければ溺れ死ぬだろう。もしそうなったら父は私がやろうとしたことに気付くだろうか。父のためにこうしていることを知るだろうか。しかし彼女は父親が去ったずっと後も彼にすがり続けていた母親のことを忘れていなかった。今の自分と何の違いがあるというのだろうか。湖の真ん中で動けなくなって先へ行くべきか戻るべきかも分からない今の自分と。彼女は泳ぐのを止め明るい空の下に浮かんでいた。太陽は頬を暖め水は恋人の腕のようだった。岸にいる友達の事を思い出し、どんなに退屈しているだろうかと思った。もう戻ろう。戻る途中でたった一度だけ振り向いた。ゆっくりと、しかし確実に彼女を抜き去って行く父親がいた。黒ずんだオレンジ色の水をかいで。

ABCDEFGHIJKLMNOPQRSTUVWXYZ

私のお話はもうおしまい
どう思ったか聞かせてよ